

此の思ひが彼女にとどかない筈がない。

今夜安眠すると、淺間山が爆發したりしやしないか。

僕は布團を頭から被て居た。

すると巡査が一人枕元へ這入つて來て坐つたのだ。

『君は何處か悪るいのですか、

どこから來たんです』

僕は返事をしなかつた。

宿の女中や若い者も室の外から覗いてゐる。

自殺でもされてはと思つて、巡査を呼びにやつたのに違ひない。

『馬鹿！ 何しに來たんだ、うるさいから出て行け』

布團をはね上げて、噛み付くやうな權幕で、僕はドナツたのだ。

手に負えないと思つたか巡査は出て行つた。暫らくして店に居た若い男が、

『まことに申し兼ねますが、これからお歸りになつて下さい』と言つて來る。